

FADO

25

Janeiro 2000

月田秀子ファド倶楽部

TSUQUIDA HIDECC FADO CLUBE JORNAL

月田秀子の昨日、今日、明日…

10月6日のアマリア逝去から3か月近い時が経ちました。電話、FAX、手紙などで哀悼の言葉をたくさんいただきました。この場を借りてお礼を言わせていただきます。ありがとうございました。

死がアマリアを孤独の苦悩から解放した、と思いつつも、偉大な歌姫を失ったポルトガルの、そして日本のファン達の哀しみの声に接するうちに、アマリアの事を、少しでも多くの人に伝える為の最後のチャンスを、アマリアの死は私に与えてくれたと思う様になった。北海道でのコンサート、そして毎年恒例の東京、大阪でのコンサートのプログラムを、ごく自然に私は、アマリアの曲で埋めていった。ポスター貼り、チラシ配り、チケット売りにかける時間を惜しむ様に私は、アマリアの軌跡を追うために、自伝、現地ポルトガルの新聞を、乏しいポルトガル語にすぎる様に読んでいった。今までのどんな時よりもアマリアが近くにいた。

その間、何回かのライブもあったが、私は、その時のことを覚えていない。たまたまアートクラブでのライブをビデオで撮っていた人がいて、そのビデオにはむせび泣きながら歌う私の姿が写し出されていた。そして、後で涙を拭うギターの圭ちゃんの姿も。心配してライブに駆け付けてくれた人もいた。そんな人達を支えられて過ごした2か月だったように思う。

先日NHK大阪の「こんにちわ、地球市民」という番組でアマリアの追悼特集を組んだ。冒頭でアマリアの「Foi Deus」(さながら神の)の歌声が流れた。天国からの声の様に思え、待機しているスタジオで、涙を押さえられなかった。忙しげに動き回っているNHKの職員には、奇異に映ったに違いない。

アマリアの事を過去形で語ることに慣れてゆかねばならない。けれど、この悲しく熱い思いを忘れてはならない。

アマリアの死以後、私は今生きている人達が愛しくてならない。生まれてくる命、消えてゆく命、その狭間で、生きている私たち。その狭間で出会い、共感し合い、また、傷つけ合いながらも、生きている私たち。何のラベルもいらぬ。生きている、その事だけで素晴らしい。自分が一番大切だという事に気付いた時、人は他人のかけがえのない命に気付くのだと思う。

皆様にとって素晴らしい年であります様に!

月田 秀子

才能と気品の旗手

国民を承認させたアマリアが体現化した社会現象について社会学者バケテ・デ・オリヴェイラ氏は語る。

世界中でおこったアマリアの声のポジュラリティー現象は一体何だったのか。大勢の、そして異なった民族と文化の心に入り込んだその声は一体何だったのか。否定すべくもないこの事実は、各自それぞれ分析するであろう。しかし、それは、人や物の中をのぞくことに慣れている社会学者にどう映るのだろうか。「アマリアが室内コンサートのため、ファンシャルに行った時のことだ。私はまだ若かった。チケット売り場では、あつという間にチケットは売り切れてしまっていた。コンサート当日、詰め掛けた群衆の力は、警察にも阻止する事ができず、とうとう会場の扉を押し破ってしまう程だった。『アマリアは民衆のものだ!彼女の声を聴くためにお金を払うことを強いることはできない。』と言っていた。その後、ファドを歌うための静けさの中、誰かが叫んだ。『アマリア!ポルトガルにおいては、あなたとカモンエスだけだ!』」

これらは社会学者が「アマリア現象のエッセンス」と呼ぶに十分なエピソードである。そして、静かにこう語った。「アマリアは階層にしていえば、下層階層出身であるが、自分の持ち物である話すための、歌うための声で、頂点にたどり着いたのだ。さらに、国の大きなシンボルであるファドを承認させるに十分な才能をもっていたのだ。」

オリヴェイラ氏にとっては、「音楽と詩ほど、民衆のものであるものはない」。アマリアはその声に、民衆の詩人から有名なポルトガル詩人に至るまでの作品を呼び覚ました。「彼女は優雅に、音楽のことはわからないと言っていた。しかし、教わる規則を教わったことが一度もなくとも、理解することは可能だということ身を以て示した」とオリヴェイラ氏は語る。

社会文化的にいうと、「ポルトガル民族は人生のファドとしての運命をもっている。多分、それがゆえに、自然に歌い、悩み、愛されたサウンドを愛し、即興的かつ衝動的に、情熱の極みにも走りかねないのだ。」アマリアはその民族のエッセンスを、詩とメロディーにして、自ら体現化したのである。

オリヴェイラ氏によると、「彼女は国の誇りをはくぐんだのだ。当時、世界を前にして、誇れるものが何もなくあったポルトガルにおいて、才能と気品の旗手になったのだ。」

アマリアは死んだ。はたして死んだのであろうか。「確かに。しかし、アマリアと共にファドが死んだとは思えない。ここで死に絶えたのは、多分、国の一ジェネレーションであろう。」多くの人々がアマリアのために涙を流す。「国は嘆く。なぜなら、神話に終止符を打つことはいつでもつらいことだから」。

*1999年10月8日付けDiario de Noticias新聞記事より
戸井田エレナさんのご厚意で訳していただきました。

季(とき)の想い - “運命の歌”を聴きながら
高澄 槐(詩人)

歌姫は哭いていた。

日本に鉄砲を初めて持ち込んだ国のひとびとの“神の定めた運命を語る歌”には、今宵の、若者宿の食堂というステージがいささか不似合いに思えた。…その場所の、持ち前の軽やかさとあかるさの故に。

歌姫はひと月前に、師匠とも異国の母とも慕ってきた歌の先達を喪って、その小柄な軀に余る程大きな、堪え難い、抑えられない哀しみを抱いて皆の前にいた。…けれど彼女は、単に「己が嘆き」だけを歌で伝えようとしていたのではなかった。“それはかみのお定めになったこと。私は全身全霊で受けとめなくてはならない。それは運命。それでも今、私の心は哭いて血を噴く。”…「諦め」とはあきらかに違うひとつの「覚悟」がそこにあり、同時に生身の人間としてのこころの嵐もある。そうしたものが混じり合って、彼女の歌は「抑えた慟哭」になって聴く者の胸に迫った。一周間の不似合いさなど最早頭から飛んでいってしまっ、わたしの両手はいつしか祈りのかたちで固く結び合わされていた。

はじめの一曲を終えて、歌姫は語る。…死せる先達はきっと“風”になったと。今やと、老いや病や歌えぬ苦しみから解放たれて、私の傍にやってくる来てくれているのかも知れない。そんな彼女を感じる。…そう云って、頬に一粒の涙を流した。

「一粒の涙」という、その歌の詞は死せる先達が見つけた。“私のことを愛してくれなくても構わない。私が死ぬときにあなたが一粒の涙を流してくれたなら、そのことだけで私は幸せに死んでゆけるだろう。”と歌われる。恋うる想いの激しくない筈はないのに、なんとつつましい「相手への願い」なのだろう。……それもきっと“報われぬ恋も神の御心。”という、けなげな「覚悟」のせい、とわたしのこころは強く感じたのだった。

月田秀子の旅日記

10月20日、スミセイライブミュージアムの“生きる”シリーズで久しぶりに五木寛之先生とお会いした。泣きながら生まれてきた人間が、様々なしがらみを抱え、宿命を携え、一歩ずつ死へ向かって進んでゆく。生きている一ただそれだけでも涙が出る程素晴らしい事のように思える。第一部の講演の時の五木先生の言葉に、私がファドに求めているものと同じものを感じた。第二部は、ゲストの前橋汀子さんとの対談。最後に持参された名器ガルネリでのパッハの無伴奏ソナタは圧巻だった。舞台の袖で聴いていた私は、涙があふれ、「こんな素晴らしい演奏の後でなんか歌えないよ。」とつぶやいていた。第三部では、五木先生との対談を交えながら、「二つの栄光」、「サウダーデ」、「難船」、「ラララ」、「暗いはしけ」を歌う。小諸ユースの古屋さんをはじめ、高山、甲府から援軍が駆け付けてくれ、地元からは松本の四柱神社の宮坂さんが地酒「真澄」のあらばしりを差し入れしてくれた。二合瓶4本のうち一本は、

函館での乾杯用にしまい込む。楽屋で出番を待つ間、日頃の睡眠不足を補うかのごとく、圭ちゃんは、床で爆睡。打ち上げでは「月田さん、黒づくめのドレスも素敵だけど、パンツ姿もいいね。Gパンなんかもさぞかし似合うだろうね。」と五木さんに言われる。「先生、わたし、舞台衣装以外はGパンしか持っていません」またまた貧乏ぶりを暴露してしまった月田でした。翌日は7時発の特急で名古屋へ向かい、空路札幌へ入らねばならず、おとなしく就寝。

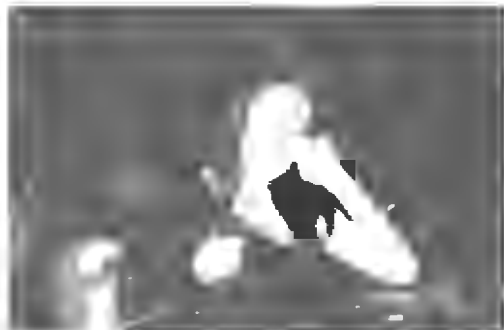
千歳空港から会場の道新ホールへ向かう途中、お目当ての新そばのザルを一枚ずつ平らげ、塩辛をあてに月田はビールでご満悦。新米の千田マネージャーをはじめ、「月田組」の奮闘の甲斐あって、会場は700席満席。函館は古いれんがづくりの倉庫を改造した金森ホールでポルトガルワインを飲みながらのコンサート。打ち上げ前に大急ぎで、若松旅館の女将の運転で函館山の夜景を堪能。脳裏に焼き付けた地上に散らばった星屑をあてにラグブルーの乾杯。翌日の若松旅館から目の前にひろがる光る海は、私の心に確かな灯をともしてくれた。かもめが目の前まで飛んで来て、光の中に吸い込まれてゆく。「アマリア」と咄嗟に私は、つぶやいた。

小諸ユースホテルでのライブは、着くなり、いつもの「じゃがいもの部屋」の二段ベッドの下段のベッドに潜り込み、大阪から6時間の車の旅の疲れをとる。圭ちゃん、一人での運転の疲れもあって、リハーサル時間になっても起きてこない。過食による肝機能障害が、過労による肝機能障害に成らない事を祈る。横浜から、セニョール・パイプこと齊藤氏が参上。ライブの後、皆、口をあぐり開けながら、夜空を見上げる。見ているうちに星の数が増えてゆく。あれが天の川だよと隣の若者が教えてくれた。15年近く前、私に天の川を見せる為に、大阪の能勢の山奥まで車を走らせてくれた人の事を思い出した。あの時と同じように、その川はほんやりと薄い雲のベールの様に天空を横切っていた。

翌日は、甲府へと向かう。途中の市場で一抱えほどの下仁田葱とマイタケを買う。車を貸してくれたH氏へのお土産だ。

今年は天候不順のせいか北海道でも余り綺麗な紅葉にはお目にかかれなかったが、小海線に沿って走る道から見る山々の紅葉は見事だった。久しぶりに絵天然色ばりの映画をみる思いだった。今回のダイナーショーは磯野氏の孤軍奮闘の賜物。いつもの顔ぶれとは違う。打ち上げ会場の「ギターラ」では、その顔たちもそろった。

彼らは皆、ファドが聴きたくて、月田に会いたくて、必死にライブを企画してくれる。大阪には、彼らの様な盛り上がりがない。それでも、「アートクラブ」「三裕の館」「巴里野郎」でのライブは定期的に続けてゆこうと思っている。それを楽しみにしている人のいる限り。



●ありがとう、そして訃報に

ずっと月田さんのライブに行きたいと思いつつ多忙にかまけ(実は心の余裕も無くて)行けなかったのですが、昨日、たまった仕事を放り出し、やっと三裕の館に行きました。あんなに間近で歌と演奏を聴けるとはなんという贅沢でしょう。生の音色、生の歌声、耳に残る余韻。空回りする日々の多忙に、干からびバラバラになりそうな心に、じわつと効いた。心の中のどこか奥の方に届く響きがあった。私には繰り返し寄せては退く波のように聴こえるファドに私の心の中のどこかが共鳴している。(それを言葉で言い表すのは難しいのですが。)感動に押し流されてみると、不思議に心地よく満たされた自分に気がつきました。ファドの酔いとワインの酔い、そして月田さんやみなさんともお話が出来、幸せな時間をもてました。ありがとうございました。

ところで、なんと言うことでしょうか、ちょうど月田さんの歌を聴いていた、まさにその頃、アマリアの訃報が世界中に流れていたのです。私が初めて月田さんの生の歌をお聴きした、その同じ夜に月田さんが最も敬愛されるアマリアが静かに逝ってしまったとは、何という皮肉なのでしょう。個人的体験としてもこの事実を私は一体どうとらえたいのか、あまりのコントラストにショックでしばらくファドを聴けそうにない。

アマリアの歌からご自身の生きる道を見いだされた月田さんの心中のお嘆きこそは察するに余るものと思います。一ファンなどからおかけできる言葉もないのですが、でも、アマリアのアルマは形を変えて月田さんのアルマとなっているはず。月田さんには歌い続けてほしい。月田さんのファドを聴かせてほしい。ながくながく心の奥に届く歌を聴かせてほしい。それがアマリアを送るに最もふさわしい追悼になることと思います。

アマリアのご冥福をお祈りしたいと思います。

1999.10.7 (大阪/SHIRAGA)

(アマリアが亡くなって、毎晩アマリアのレコードを聞いている人もいれば、また、当分、聞けそうもない人もいます。人様々なアマリアの死の受け止め方がある様です。できるだけたくさんの方の思いを携え1月にはアマリアのお墓にお花を捧げてごようと思っております。アマリアの棺はジェロニモス修道院に葬られるというニュースを聞きましたが、まだ決まらず、多分、まだブラゼーレスの墓地に眠っているかと思えます。)

●風が吹く度に落ち葉が舞い上がり見る見る落ち葉の絨毯ができる季節になりました。

先日のコンサートは心より感動しました。仕事が少々忙しく、アマリアの追悼であるがゆえに、躊躇していた事もあり、当日まで迷っていましたが、全てを忘れて会場に直行しました。

コンサートの途中から、月田秀子がアマリアとオーバーラップしながら心にインプットしてきました。ここ十年間あなたのコンサートに行き、今回ほど、こんなにファドの心が宿っているのかと思ひ知らされたコンサートはありませんでした。ペコーでシャンソンを歌い、惱んでポルトガル行きを決行し、不安でたまらない時もあったと思います。食えなくなったらお茶漬けくらいはいつでもどうぞと口癖の様に言っていた私に、あなたはファドの心(魂)を通して凄くプレゼントして下さいました。本当にありがとう。「アマリアの曲…さよならアマリア、ありがとうアマリア…」天国にいるアマリアに届いたコンサートでした。

会場で買ったROYAL OPORTO(ポートワイン)を飲みながら書いてます。

(神戸/SOYOKO)

(シャンソンを歌い始めた頃からずーと見守ってきてくれたSOYOKOさん。向こう見ずで、不器用で、身勝手、馬鹿な事ばかりしてきた私ですが、ようやく自分のゆく道が見えてきた様な気がしています。もし食えなくなったら、お茶漬け食べさせてね。思いつき好きな事して生きさせてもらいます。したくてもできない人の分もね。)

●今夜のコンサートは最高でした。今まで時々感じた何かに対する気がねとか、戸惑いの言ったものが消えて、突き抜けたようなひたむきさが迫ってきました。いつもだと、始めの2、3曲はハラハラするのだけれど、

今夜のあなたは違っていました。気迫に圧倒されました。まるでアマリアが乗り移ったみたいで、歌っているうちにどんどん顔が変わってくるのが分かりました。声にも、今まで聞いたことのないくらい奥行きと深みを感じられて、聞いていて心が震えました。泣いてしまいました。

端の席から隣に移ってきた60代後半とおぼしき女性に、休憩時間に話しかけられました。アマリアに魅せられて40年、月田さんのファドを知って年一回コンサートを聞きにきていること、シャンソンも好きだけどファドだけが自分の「癒し」になっていること、月田さんがどことなく似ていることいつもCDを聞いていること、自分ももう年だからあと何回月田さんのコンサートを聞きにくる事ができるのかしらと、問わず語りに話してくれました。今夜の月田さんは気合いが入っていますねとも言っていました。あなたに伝えたいと思いました。

アマリアを失ったことは、私たち第三者には計り知れない強い衝撃だと思えます。でも、これからこそが本当の“月田秀子のファドの新しい出発だ”と、このコンサートで感じました。アマリアも、ポルトガルから遠く離れた日本で、あなたのまいたファドの種が芽を出し、成長し、しっかり根付きつつあることを見守っていることでしょうか。同じファドを愛するものとして、あなたの哀しみや苦しみや、それに立ち向かう勇気や、抱えているものすべてを承知したとでも言うような野上圭三さんの慈愛に満ちたまなざしが印象的でした。たくさんのもをもらったコンサートでした。ありがとう。

1999.11.18 (大阪/KEIKO)

(KEIKOさんをはじめ会場の皆様の暖かいまなざしと熱い拍手が、私を歌わせてくれたのだと思います。そして後ろでしっかり支えてくれたのがギタリストの二人だと。そして、アマリアも、見守ってくれていたのだと。いつまでも、アマリアにしがみついてはられない。2000年、新たな月田の出発です。)

●ニューヨークのファド

ニューヨークにファドは似合うか、と当地に住んで1年半、心の片隅に一つの疑問があった。何しろ高層ビルが立ち並び、24時間車の騒音の絶えない街マンハッタンでのことである。しかも現在景気が良く、街は一層活気を呈している。ファドは寂し過ぎないか?

アマリアが亡くなって一月ほど後のある日、1日分が数十ページあるニューヨークタイムズに目を通していると、ほんの小さな広告に“FADO, MISLA”の言葉があるのが目に飛び込んできた。一回切りのコンサートだが、運良くその日の夜のスケジュールは空いていた。11月19日(金)マンハッタンのあるタウンホールでのミーシアのコンサートは世界音楽協会という団体の主催で開かれた。8時半開始予定が、9時近くになったのも、ああラテンの世界と納得。やがて暗がりから静かに現れたミーシアのファドの音曲に浸っていると、外の喧騒が嘘のように遠のいた。ニューヨークでファドを聞くのは、実に心の浄化作用になると、聞くにつれ感じたことだった。彼女のレパトリー演奏が一通り終わると、拍手の中から“Mais um (もう一曲)”とポルトガル語の音が響き、やはり、かの地の人が随分聞きにいらしているのであろう。するとミーシアは「ちょうど10年前にアマリアは、この同じ舞台で歌ったんですよ。」といかにも愛情を込めた風情で聴衆に語りかけた。と、その場で身を屈め、右手を舞台の床に触れ再び身を起こすと、その手を自分の胸に当てたのだった。私達聴衆は彼女がどんなにアマリアを愛しているか、一瞬のうちに感得したのだった。そして曲の意味を説明して歌い出したのが、あの“Lágirma(涙)”であった。

次に翌日の新聞に載った記事の一部を紹介しよう。「ミーシアのアンコールの一曲、“涙”は今年亡くなったファドの女王アマリアロドリゲスのレパトリーからのものである。それは“あなたの涙ひとしずくで、私は死ぬわ”と誓っている。ほほささやかに近い調子で歌い始め、次第に悲しみに打ち震える感情の吐露へと高めて、この歌の持つ強さを全て出しきって、ミーシアはファドの伝統に敬意を表した。」

(ニューヨーク/清水 茂美:Caldo Verde主宰)

読切連載
秀子のエピソード帖 [その19]
内間 天馬

月田秀子における 「タイプ別ファン気質」の研究

先日、NHKラジオからポルトガル語が聞こえてきたので意味も分からず耳を澄ましていると、やがて「ヒデオツキダ」を連発しはじめたんです。この単語は僕でも知っています。なにやら月田さんのことを喋ってるんだなあ、そうだ、月田さんに知らせてあげなくっちゃ、と電話をしても本人出ないんです。で、諦めてラジオの前に戻ると、ナント、本人が喋っているではありませんか。アマリア・ロドリゲスの追悼番組のようで、月田さんしか知らないエピソードの数々は、彼女がこの番組にとって最適のゲストであることを示していたと言えます。さすがNHKですね、将来の紅白のこと、考えているんでしょ、きっと。

さて、月田さんのファンにはどういうタイプがいるか、思いつくままに書いてみましょう。

タイプA.「中年男ハーレクインロマンス派」秀子、俺についてきてくれ！妻を捨て、スペインはマジョルカ島への逃避行。追手を振り切り、数々の障害を乗り越え…。ハチャメチャストーリーを勝手に考える…。勝手に考えてくれ。

タイプB.「連帯同志的心情派」月田さんと同じく70年安保経験派。このタイプは決して月田さんと向かい合って食事などしない。横に並んで座りたがる。静岡の白井氏などこのタイプ。

タイプC.「お姉様、ステキ！派」アンアン、ノンノンを卒業してクラッシーあたりですかね。婦人公論はちょっと早いし、家庭画報はちょっと重い…。このタイプ、決してライブハウスへ彼氏を連れて来ない。女同士でくる。もっとも彼氏のいないケースが多いんで。

タイプD.「経済復興直前焼け跡懐かし派」多感な青春期にアマリアの「暗いしげ」を耳にし、秀子の歌に遠い青春を懐かしむ。目付きは常に遠くを見ている。元サウスタワーホテル社長の本田さんなんかこのタイプちゃいます？

タイプE.「ポルトガル旅行後遺症派」リスボンで初めてファドを聞き感動。帰国後、月田秀子の存在を知り、再感動、うわーっ、日本にもおったんや！大阪・天下茶屋の塚本さんやね、これは。

タイプF.「宝塚から鞍替え派」これは中年以上の女性で、ちょっとリッチ。宝塚の追っかけなども…。もちろん「月組」ファン。芦屋の森田マダム、あんたの事やで。

タイプG.「純粋音楽鑑賞邪念いっさいなし派」これは月田秀子を音楽家として研究・分析するタイプ。月田秀子に於ける高音域はアルトとしての新しい地平を築き…などと難しい理屈を言いたがる。

勝手に言うときなさい。東京・世田谷のTさんがこれ。

タイプH.「金があったらバロン派」若干タイプAに通じるところあり。が、ちょっと態度が横柄。おい秀子、新地あたりに店ださへんか？めんどう見たるで。大阪・豊中のNさんですわこのタイプ。実は、今年の春に倒産。ご本人さん、行方不明。

タイプI.「年下のオコの子派」イチローもかなり年上をもらたし、愛があれば…、嗚呼！ばく困っちゃう。勝手に困りなさい、大阪・平野区の片山くん。

タイプJ.「エエ女やんか派」このタイプ、あまり月田さんの歌は聴かずに、顔その他をしげしげと見る。目付きがちよっと…。福岡のパーテングーの重森くん、大阪・西成のありむらさん、大阪・長居の芝本氏、ええと、それから…。多いんだよね、このタイプ。

その他、「ひと目ほれ派」「いっしょにグルメ派」「いっしょに呑みたい派」「出来ることならいっしょに混浴派」とまあ、いろいろあるもんですなあ。えっ、お前は何派ですって？はくはですね、ええーとー、あの一、あつ、もう書くスペースがなくなっちゃっ…

vamos cantar!

涙

訳詞 Caldo Verde

哀しみが 哀しみが 沁みしてくる
哀しくて 目覚める朝
まだ残る この胸の想い
あなたが 好き たまらなく 好き

胸の奥で うづくこの想い
声にして 声にして 言ってみる
嫌い あなたなんて嫌い
なのに 待つ の 夜の夢の中で

いつかある日 死ぬ定めなら
まして あなたに逢えぬなら
このショール このショール
大地に広げ そのまま眠りましょう

やがて死ぬとき あなたの涙
私のために 流してくれるなら
ひとしづく そのひとしづくで
幸せに満ちて 永遠の眠りにつきましょう

LÁGRIMA

Música : Amália Rodrigues
Letra : Carlos Gonçalves

Cheia de penas, Cheia de penas me deito
E com mais penas, Com mais penas me levanto
No meu peito, Já me ficou no meu paito
Este jeito, O jeito de te querer tanto

Desespero, Tenho por meu desespero
Dentro de mim, Dentro de mim um castigo
Não te quero, Eu digo que não te quero
E de noite, De noite sonho contigo

Se considero, Que um dia hei-de morrer
No desespero, Que tenho de te não ver
Estendo o meu xaile, estendo o meu xaile no chão
estendo o meu xaile, e deixo-me adormecer

Se eu soubesse, Se eu soubesse morrendo
Tu me havias, Tu me havias de chorar
Uma lágrima, Por uma lágrima tua
Que alegria Me deixaria matar

REFLITA

Páre, caminhe.
Prá que tanta pressa?
Onde espera chegar?

Páre, respire.
Lembre-se que o ar ainda é nosso vital alimento.

Páre, reflita.
Prá que tanta pressa?
Se mais importante do que a chegada
é a própria caminhada?

Páre, caminhe, respire, reflita,
Pois o mais importante nisso tudo
ainda continua sendo você.

考えてみて

なぜそんなに急ぐの?
どこへ行こうとしているの?

立ち止まって、深呼吸して
思い出してみようよ
息することだって
“生きる力の栄養”だっていうことを

立ち止まって、深呼吸して
考えてみようよ
ゴールよりも
ゴールまでの道のりが大切だってことを

急がないで歩こうよ
歩いて 深呼吸して 考えてみようよ
本当に一番大切なのは
あなた自身だってことを

この詩は、昨年12月2日、NHK大阪で放送された「こんにちは地球市民」の中で、朗読された詩です。作詞は、キャスターでもあるブラジル出身のヴァレリア・田中さん、訳詞はNHKの制作スタッフ小林恭子さんです。当日は、アマリアの追悼特集として私も出演させていただきました。日本語キャスターの朝日由美さん共々、一つのマイクを囲んでの生放送。心が熱くなってゆくのがわかりました。毎週木曜日は、ブラジル語を交えての構成で、夕方4時5分から5時までの番組です。是非聴いてみて下さい。

informação

- 1月5日から2週間ほどポルトガルへ行ってきました。その為、1月5日の「三裕の館」でのライブはお休みさせていただきます。
- 某カルチャーセンターからファドの講師の依頼があった。ファドを広める為のひとつの方法かもしれないが、どうも私の柄ではないファドを教えるとか、教えてもらうという事にまず引掛かってしまう。いままで通り、私は、私のファドを歌ってゆくことしかないと。ファド倶楽部主催で何かやりたいとも思うが、今のところ、自分の演奏活動と事務局の雑用で手一杯という状態。どなたか、中心になって企画してくれる人がいるとありがたいのですが…。
- 北海道各地で、月田秀子ファンクラブができています。いわゆる既成のイベント屋さんに頼らず、あくまでも手作りで企画、制作をしてゆきたいというのが主旨です。近くにいてもらえたらどんなに助かるかと思いますが、札幌の千田マネージャー、よろしくお願いします。
- 東ティモールの惨状に、かつての宗主国だった関係上、心痛めているポルトガル人がたくさんいます。アマリアも生前、憂慮していたし、ファド倶楽部の発起人でもあるAntónio Gouveia氏も、その為いつものひょうきんさを失っています。新任の駐日ポルトガル大使であるマヌエル・デ・アルメイダ・レイテ大使も、“ポルトガル通信26号”で、日本の印象について述べる為の紙面を割いて、「東ティモールに幸せを」という特別寄稿を寄せています「私たちの考えは定期的に正しく投票をし、自らの運命を決めた東ティモールの人々と共にあります。…あまりにも道徳、物質的支援が必要で、しかもその支援を受けるに値する迫害された人々『ティモレンセ』のために、すべての人が結束される様に私たちは期待し、それを確信しております。の要請に応じて、月田秀子ファド倶楽部として、倶楽部の会費の一部を義援金として、一月訪泊の折、一番確実な方法で渡したいと思えます。皆様のご理解をお願い申し上げます。

月田秀子ファドコンサート '99のライブ盤CDを春くらいには出したいと思っています。後日、ご案内を送らせていただきます。楽しみにしていて下さい。

月田秀子ファドコンサート '99「さよなら、アマリア。ありがとう、アマリア。東京公演でのビデオ、編集集中です。曲目、構成は大阪公演と同じです。ご希望の方は、斉藤さんまで、お電話もしくはファクス下さい。(TEL/FAX 045-713-6277) 発送は、月田がポルトガルから帰国後になります。

<月田秀子のスケジュール>

| | | |
|-----------|------------------------|----------------------------|
| 1月 22日() | 岸和田・自泉会館 | |
| | アートセッション—月田秀子ファドコンサート— | * 予約問合せ tel:0724-45-1070 |
| 27日(木) | 京都・四条河原町「巴里野郎」 | * 問合せ tel:075-361-3535 |
| 31日(月) | 大阪・心齋橋「アートクラブ」 | * 問合せ tel:06-6212-2870 |
| 2月 2日(水) | 大阪・南方「三裕の館」 | * 問合せ tel:06-6304-1745 |
| 24日(木) | 京都・四条河原町「巴里野郎」 | * 問合せ tel:075-361-3535 |
| 28日(月) | 大阪・心齋橋「アートクラブ」 | * 問合せ tel:06-6212-2870 |
| 3月 1日(水) | 大阪・南方「三裕の館」 | * 問合せ tel:06-6304-1745 |
| 27日(月) | 大阪・心齋橋「アートクラブ」 | * 問合せ tel:06-6212-2870 |
| 30日(木) | 京都・四条河原町「巴里野郎」 | * 問合せ tel:075-361-3535 |
| *3月中旬 | 北海道コンサートツアー2000 第一弾 | * 問合せ tel:011-662-1848(村) |
| *7月 1日 | 東京・銀座「アルテリーベ | * 問合せ tel:045-713-6277(斉藤) |
| 2日 | 藤沢「桜んぼの会」 | * 問合せ tel:0466-24-2229(加藤) |

<お詫び> 会報24号の1頁右1行目「かみつくよな」は、「からみつく」、2頁左の下から5行目「愛の解」は「愛の理解」の誤りです

<編集後記>

23号から、アサヒ精版印刷の築山社長のご厚意で、安倍真弓さんのご協力を得て編集しています。内容に関しては全くの月田の独断だけ。ご意見、ご投稿、切にお待ちしています。ミレニアムをさして意識しているわけではないけど、やはり何となく気がひき締まる思いがします。新しいことに挑戦するのもいいけど、続けてきたことを、もう一度見つめ直すことから、今年は始めたいと思っています。きつと新しい発見がある筈だと 今年もよろしく 月田

月田秀子ファド倶楽部ホームページ

<http://www.asahi-net.or.jp/~wc3k-smz/FADO/menu.html>

- 月田秀子ファド倶楽部ジャーナル 第25号
- 2000年1月1日発行 (季刊：年4回発行)
- 編集・発行「月田秀子ファド倶楽部」事務局
- 〒543-0023 大阪市天王寺区味原町2-10-502
- TEL&FAX 06-6765-4808